

松谷みよ子著『現代の民話』

「あなたも語り手・わたしも語り手」から

重 信 幸 彦

「あなたも語り手・わたしも語り手」

本書は、「現代の民話」を問い続けてきた松谷みよ子が到達した、一つの境地を形にした一冊といえるだろう。

そして我々が、本書を読み解き、そのメッセージを受け取るための重要な鍵は、副題にもかかげられた「あなたも語り手、わたしも語り手」というフレーズにある。それは、松谷自身が民話に向き合い、そして一人の表現者として積極的に民話を表現活動に結び付けていく根拠になっている言葉として受け取ることができるからだ。まず、松谷が、この「あなたも語り手、わたしも語り手」という考え方に到達した過程が、本書のなかでどのように語られているか、その第1章から見えてくる。

1970年代に松谷は、宮城県女川で岩崎としゑという語り手に出会い彼女のもとに通

った。そして、としゑから、従姉妹マサコの話として聞いた飢饉で飢えて死んだ子供の霊の話や、としゑが語る死に瀕して出会う川の話などに触れた。それらは、その時たまたま松谷が書いた作品『死の国からのパトン』（1976）と重なりあうような話だったという。松谷は、「としゑさん、マサコさんという二人の人と、私が筆で語ったとはいえず、同じ発想を共有していたこと」を知る。松谷は、「都会に生まれ、民話も知らないで育った私」と語り手の発想との一致の経験を、イギリスの作家フィリップ・ピアスの「誕生以前からの記憶」という言葉を通して理解しようとする。そしてその「誕生以前からの記憶」を共有しているということの発見により、松谷は、「あなたも語り手・わたしも語り手」という考えに達した。

「その時突然として、私も語り手の一人なのだ、その資格をもっているのだと納

得した。さらに、私も語り手という立場に立つことは「あなたも語り手」という現実につながる。人は生きていくなかで、自らも気がつかないうちに語り手となり、民話を生み続けているのだ。それがなくては現代の民話はいえない。人は意識して現代の民話を語るのではない。人は人である証として、自分でも気がつかないうちに語り、だからこそ普遍性を帯びるのである。」（24—25）

そして本書のなかで松谷は、この我々の想像力の深い部分にあるだろう、とりあえず「誕生以前からの記憶」と名づけた何かが民話に一つの力を与えるという考え方を、具体的に「現代の民話」を通して彫り出していることとする。ここで、本書の構成を示しておく。

現代民話とは

1、あなたも語り手、私も語り手

ぼうさまになったからす

2、昔話とのかかわり 偽汽車・蛇婿 現代の民話から昔話の型へ／昔話と現代

民話の重なりについて／環境破壊を告げる民話／神かくし

3、抜け出す魂、あの世への道 夢の知らせ／あの世への道／生まれ変わり／幽霊

4、土を喰う 戦争と現代民話 戦争にまつわる現代の民話／事実を語る

5、学校の怪談

6、口承から書承へ、そして口承へ 私の感じる遠野・その文芸化について／事実からの文芸化と口承、そして新

たる伝説へ

7、笑い

あとがき・参考文献

「2、昔話とのかかわり 偽汽車・蛇婿」では、「偽汽車」、実際の出来事として人間の娘と蛇との交渉を語る話、また環境破壊を告発する河童の話、木を伐採して森を破壊することを告発する話などの「現代の民話」と「昔話」との重なり合いを読み取る。「3、抜け出す魂、あの世への道」では、抜け出す魂や生まれ変わりなどを語る「現代の民話」のなかに、「あの世」を想起する我々の想像力のありようを見る。「4、土を喰う 戦争と現代民話」では、「英霊の帰還」や加害の経

験を語る話など、その背景に厳然とした歴史的事実の根が存在する「現代の民話」が、我々の歴史に対する理解にどのような喚起力と可能性を持つかを語る。それは、一方で歴史における「記憶」の可能性をめぐる議論に重なりうる射程を持っている。「5、学校の怪談」は、学校という近代的空間が生み出す話の展開をたどる。

そして「6、口承から書承へ、そして口承へ」では、「遠野物語」を、佐々木喜善、水野葉舟、柳田國男の関係性のなかに置き直し、そのそれぞれの文体の相違から、「口承」と文字の豊かな関わり可能性について説き起す。この6章は松谷自身の創作活動と「現代の民話」という問いを接続していく役割を果たしているといえる。松谷は、自らの作品『まちんと』（1983）、「あの世からのことばで 私の遠野物語」（1984）の創造過程を、そうした「口承」と文字／文芸化の回路が持つ可能性の一例として提示する。綴り書くという行為がいっそう日常化した現在において、それは単に一人の作家の創作論を越えて可能性を持つ議論だろう。

最後に松谷は、「7、笑い」を配置し、現代の悲慘や、制度にからめとられたへ生

の不自由さ、大きな抑圧的な権力などに「笑い」により対峙する想像力の可能性について語る。

まず第一章で、個々の話の向こう側、というより話を語る主体の奥底に想定される、共有された何かをたぐり、そこから「わたしも語り手、あなたも語り手」という考え方が取り出される。そして、その共有された何かを検証する過程として、昔話と現代民話との関わりを説く第2章と、私たちの生き死の狭間に発動される想像力を論ずる第3章が置かれる。そして今度は、近代の歴史過程や制度のなかでそうした想像力がどのように話を具体化していくのかが、戦争という歴史と学校という制度との関わりのなかで検討される（第4章、第5章）。この「第2章・第3章」と「第4章・第5章」は、松谷が見た現代民話という事象を、一方は想像力の側から、もう一方は歴史と制度の側から、それぞれ表裏の視点から具体的に検討している部分として読むことができる。第6章では、最初に提示された本書を貫いている「わたしも語り手、あなたも語り手」という地平に立ち戻り、自らの創作を、「口承」の話との交通のなかに確認していく。そして本書の最終章が「笑い」

で締めくくられていることは、松谷自身が、「笑い」の力のなかに一つの希望を見出そうとしていることを示しているはずだ。

こうして松谷みよ子が、本書のなかで指し示した境地は、「現代の民話」という問いのなかで醸成された一つの実想と言えるものと、僕は思う。

「現代の民話」という思想

ここに示された、「誕生以前からの記憶」という物言いや、またもつと直裁な「日本人の心にひそむ民俗の深層」(43)という物言いによって手繰られる「現代の民話」の世界は、ともするとこの国の民俗学のみならず手垢にまみれ、また民俗学がその概念としての「起源」すら忘却しそれに囚われてきた、「伝承性」という言葉に、一見すると、重なりあっていることも確かだ。そうした物言いが、口承文芸研究ひいては民俗学においては、古形の「残存」をことさらに貴重なものとして位置付けて、学問のありようを尚古の視線のなかに閉ざしがちだったことは、否定できない。また、そうした過去から連綿と伝えられた何かの存在を語ることににより「私たち」の自意識をかたどっていく物語が、どこかでナ

ショナルな物語と寄り添ってしまふのだという最近の批判も、無視できない。その意味では、読みようによっては、本書は無防備に見える。

しかし、松谷のこの思想は、民俗学における「伝承性」という概念にそのまま重ねてしまえるほど単純ではないだろう。「あなたも」「わたしも」という関係性を根底に置くことを通して、我々は互いに言葉交わし受け止

めあい、そして互いにわかりあい、認めあうことができるに違いないという、一つの前向きな人間観を形にしていることがうかがえるからだ。それがまた「現代の民話」という問いの力と可能性として想定されている。

民俗学における伝承論が、寡聞にしてそのような人間観を提出するような強さを持つて語られたことがなかったということと比べると、松谷の「あなたも語り手、わたしも語り手」という思想は、「伝承性」という概念よりはるかに積極的で、かつ現在の(アクチュアル)なものだと評価するべきだろう。松谷の創作という営為が、そうした人間観を確固たるものとして作り上げていくことを可能にしたのだろうか。そして、口承文芸研究であり民俗学という学問のみならず、そうした

思想を表立って語ることが稀であることにくわえ、それはことさらに論ずる必要のないこととしてきてしまったのではないかと思えるふしさえある。それに対して、松谷の「現代の民話」は、まさにこの一点において、たちあがり、その「現代の民話」の可能性は、狭義での学界という言語空間を突き抜けようとする。

「現代」というアーリーナのなかで

しかし、僕自身は、その言語空間を突き抜けたその地点で、ふと立ち止まってしまふ。

確かに、松谷の「あなたも／わたしも」が、一つの共同性の可能性を志向していること、そしてそれは「国民」などにもたれかかってしまふのではない、もう一つの共同性の可能性を志向していることは確かだ。だが、「現代の民話」を、「あなたも」「わたしも」共有していくという過程は、はたして、そこに刻まれた、たとえば「誕生以前からの記憶」が保証してくれるものなのだろうか、と。

「現代」という場では、多様な歴史が堆積し、またそうした歴史に規定された様々な制度が否応なく我々を取り囲み、拘束する。そのなかで我々自身も、複雑な欲望と惑惑とエ

ゴイズムのなかで、逃れがたく互いの差異を抱え込んでいた。また正しさや美しさそして優しさすらも、決して無垢なものとして存在しているわけではなく、あくまでも時代の産物として姿をあらわし、我々を巧妙にからめ取り、その気にさせる。そうした「現代」は、そこに生きる者の実感としては、「あなたも」「わたしも」互いに通わず言葉を持てず、デイスコミュニケーションとすれ違いが当たり前になっっている、むしろ葛藤と闘争の場（アリーナ）なのではないか、とさえ思う。そうしたなかでは、「現代」を語る話、「現代の民話」を共有していくという過程は、実は、「誕生以前の記憶」や「日本人の心に潜む民俗の深層」が保証してくれるのではなく、むしろ我々自身が試行錯誤しながら生み出しているかねばならないのではないか。もう少し踏み込んでいうなら、そうした共同性は、我々がどのような時代のなかで生き生かされ、そこどのような歴史の過程が刻まれているのか、それを問う我々に課せられた「問題」を自覚し共有するという過程のなかで、かろうじて生み出されるのではないか思うのである。

だから僕自身は、「誕生以前」や「深層」

という言葉禁じ手にして、あくまでも歴史の表層と現代の日常の表層にこだわりたい。他者を死にまで追いやることのある異物排除の想像力を殫擻に発動する話や、国家の物語に対して我々自身がその気になって支えていく美談のありようまで含めて、我々の危うさを語る話をも見つめる必要があると思っ

てい

る。今、この時代を生き、それと関わり、考えようとする者にとつてどのような道筋が有効なのかは、わからない。もちろん一つの道筋だけが有効なわけではない。僕自身が、自分

書評

石井正己著『遠野物語の誕生』

石井正己著（浦田穂一「写真」）『図説・遠野物語の世界』

藤井貞和

いま私のまえに、古びた『寺小屋雑誌』7（一九七八年十一月）がある。小田富英「柳田国男『遠野物語』初稿本」という、新資料発掘が、六ページにわたり、掲載されてあるのを見いだす。これが私には出会いだった。

「初稿本」の書き出し部分が、わずかに丁寧ながら、かすれたコピーのような体裁で、かかげられる。毛筆での、「遠野は今岩手県上閉伊郡二属す」以下を、そこにたどり読むことができた。

寺小屋教室——寺子屋が正しいと思えるも

が選んだ道筋のなかで、いつか松谷の「あなたも語り手、わたしも語り手」という思想に出会うこともあるのだと思う。その時、もう一度松谷みよ子の「現代の民話」論を読みたい。

「学」という作法と制度の枠組みを越える

射程を持って綴られた本書は、我々にそんな自分自身の立ち位置そのものを問い詰めてくれるのである。

（中公新書、二〇〇〇年八月、中央公論新社、七〇〇円）

（しげのぶ・ゆきひこ／北九州市立大学）